

○インスペクターからのコメント（86回）

科学的な調査や試験をすることで、自然と工事というのは折り合いがつかないと思います。それに加えて様々な政治的問題が入ってくるので、道路建設というのはなかなか難しいな、と感じています。ただ、ここを起点にして、名古屋市の道路建設が環境に配慮したり自然に配慮したりして頂けるようになったのは、非常に大きなことです。皆でいろいろ調べて楽しく勉強しながら、ここでの活動が名古屋の道路行政ほか様々なところに波及するようなやり方で続けていければいいですね。



岡村インスペクター

今まで継続してきたモニタリングのうち、今回話し合いをすることで、モニタリングを終了してもいいのではないかとという項目がいくつか出てきました。もともと施工ワーキングでの調査は専門的なものではないので、この課題を何とかできないかと我々の考える中で、今回のような見直しをしながら、結果が我々自身で説明できるようにこれからも考えて進めていかなければなりません。せっかくここまでやってきたので、最後まで見届けていきたいと思います。



大竹インスペクター

施工ワーキングが始まって以来、要望していました昭和高校前の交差点改良が実施されて、渋滞を緩和するための対策として今後期待できる状況ができたことが、今回とてもよかった点です。長期的な視野に立って、改善も少しずつしか進みませんが、その一歩が確認できました。今後もこの地域全体を見た時の交通課題がたくさんありますが、そういったものに着目しつつ、環境にもやさしく、地域の人たちにも役に立つ活動ができればと思っています。



藤田インスペクター

◇動物グループ

センサーカメラによるタヌキの生息調査を継続しています。平成23年～24年頃、疥癬病（かいせんびょう：ダニによるかゆみの激しい皮膚病）によって、撮影される数が減っていたタヌキが、昨年からまた撮影されるようになりました。

【タヌキを指標動物とする理由】

- ★相生山の生きものの中で最も大型で行動範囲が広いと考えられるため。
- ★タヌキが生息できる森は木の実などの食べ物がある豊かな環境があり、他の生きものも生息できることを示しているため。



エコトンネル内で撮影されたタヌキ

◇交通グループ

弥富相生山線の歩道と散策路の接続について、これまでも検討してきました。今回は、散策路の現状と利用の状況を把握する目的で、実際に散策路を歩いてみました。



方向サインなどが劣化して見にくいなど、はじめて訪れた人には分かりづらいかもしれません。



平成22年度のアンケート調査によると、年に数回～月に1～2回の利用者が多く、1時間～1時間半の散策をされるようです。



いつもの活動は、道ぎわが中心なので、範囲を広げて歩いてみると様々な発見がありました。

今後の活動の中で、歩道と散策路の接続に関する課題を整理して、解決策を検討していきます。

問い合わせ先

名古屋市 緑政土木局 道路建設部 道路建設課内「環境に配慮した道づくり」施工ワーキング事務局
〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号
電話:052-972-2873 FAX:052-972-4168

<http://www.city.nagoya.jp/shisei/category/53-3-7-0-0-0-0-0-0-0-0.html>



●第86回施工ワーキング

平成26年9月7日（日）に第86回施工ワーキングを開催し、26名が参加しました。

今回は、グループ活動を中心に、モニタリングや現地の状況確認などのフィールドワークやグループごとに担当しているテーマに関する話し合いを行いました。

◇施工グループ&植物グループ

シェルター構造上部の水位および土壌水分量の調査を継続してきましたが、値がほぼ一定で変化が見られません。今後、調査を継続するか否かについて、調査を実施している施工グループと植生管理を行っている植物グループと合同で話し合いました。

シェルター構造上部 水位調査

◆現状

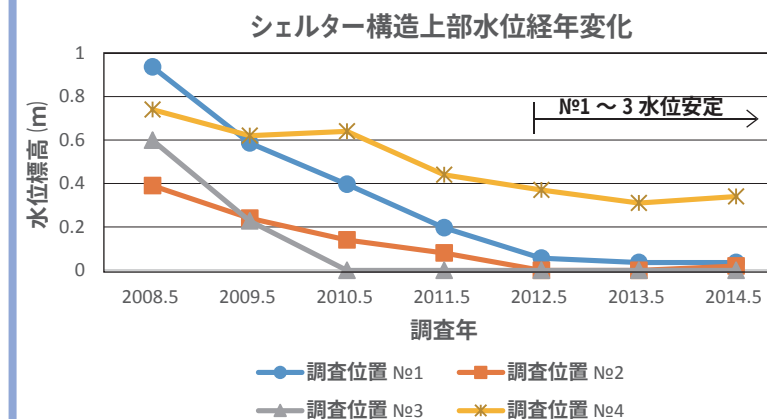
シェルター構造上部の水位は、NO.1～NO.3においてこの数年間一定となっています。これは、植生がある程度まで成長し、蒸散量が一定になったためと考えられ、今後も変化はないと思われます。

植生の成長度合は、区間によって大きな違いは見られません。客土がある程度厚い（1.5m）ため、シェルター構造上部の構造の違いによる水位の差が植生に影響しないことが原因と考えられます。

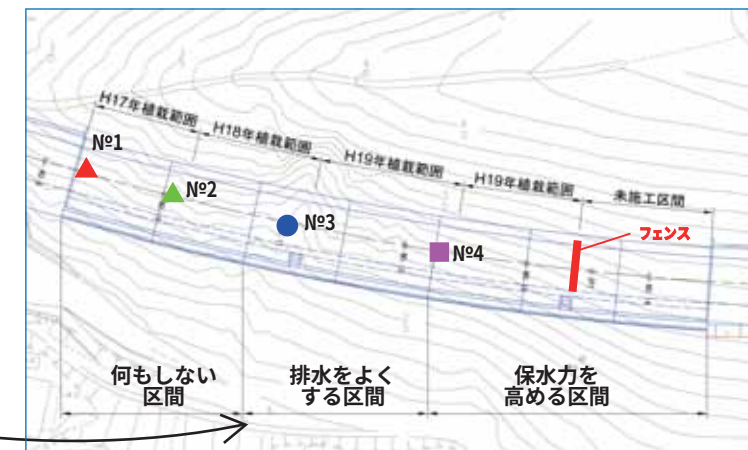
◆今後

植物の成長はどの区間も同様なので、植物が成長して安定しているNO.1～NO.3を継続して観測する必要はないと考えられます。

NO.4は植栽を行っていないため、現時点では観測する必要性が低い状況です。ただし、今後工事が再開された場合、植栽後は観測を再開する必要があります。



シェルター構造上部水位調査位置図



シェルター構造上部 土壌水分量調査

◆現状

土壌水分量は、1年半観測しましたが箇所・時期にかかわらず一定です。

◆今後

土壌水分量については今後も変化はないと考えられ、シェルターの外側（地山）とも差異が少ないため観測する必要性は低いと考えます。

今回は、継続してきたモニタリングの結果を考察し、今後の活動を見直すきっかけになりました。